

(論文内容の要旨)

プラトンの哲学は、一般的に初期、中期、後期の三つの時期に区分される。通常
の解釈によれば、中期にいたってプラトンはいわゆるイデア論を導入したとされ、
その導入の中心的理由は、われわれが感覚を通じて経験するこの世界はつねに生成
流転しているため、そこには確定的な言説や知識が成立不可能であるということに
求められてきた。さらに、イデア論は対話篇『パルメニデス』において批判され、
後期対話篇においては、『ティマイオス』をのぞいて、イデア論が大々的に語られ
ることはなくなったため、プラトンは後期にいたってイデア論を放棄した、あるい
は、イデア論から一定の距離をとっていたという解釈の傾向が、20世紀の後半以後
有力であり続けている。このような見方をする論者たちは、プラトンは後期にいた
るとそれまで流転して止まないと理解してきた感覚的世界について何らかの安定性
や客観的性格を見出し、それについての言説や知の可能性を認めたと考えるのであ
る。本論文は、以上のような解釈に対して、後期対話篇においてもイデア論が堅持
されていることを主張し、しかし他方で、感覚界についても完全ではないにせよ何
らかの認識を得る可能性が示唆されていること、さらには、イデア相互の関係性の
研究が感覚界についてのそのような理解にも貢献するということを論じている。

まず、第一章は、『メノン』での、いわゆる「探究のパラドクス」の適正な理解
を目指すものである。『メノン』は、初期から中期への移行期に位置づけられる対
話篇だが、プラトンが独自の形而上学を積極的に展開しはじめた最初の作品であり、
そこで語られる想起説の意義を理解しておくことは、後期対話篇における知識論の
理解にも不可欠であると論者は考える。しばしば研究者たちは、このパラドクスに
対してプラトン自身が持ち出している解決法である想起説が、実際には失敗してい
ると論じてきた。しかし論者は、通常想定されているのとは異なる探究のモデルを
設定すれば、パラドクスを適正に解釈することができ、また、想起説がそのパード
クスの解決に貢献することを示すことができる、と考える。すなわちこのパードク

スに対する応答である想起説は、容易には特定し難い倫理的性質の特定を可能にし、探究を開始する可能性を保証するための理論として理解できるのである。

第二章では、後期対話篇『テアイテトス』において知識の定義を探究する試みが失敗の内に終わっていることの意義の解明につとめている。まず、「知識とは言説を伴った真なる判断である」という知識についての第三の定義を検討し最終的には却下しているこの対話篇の第三部の構造を概観し、つづいてこの定義の最終的な拒否理由についてのこれまでの諸解釈を簡潔に整理することによって、現在の主な諸解釈がこの定義が論駁される理由を「無限背進に陥ってしまっているから」と理解していることを確認する。論者は、このような解釈を一定程度は評価しつつも、論駁の理由をむしろプラトンの言語不信のうちに求めることを提案している。

第三章は、『ソピステス』篇で論じられている「像」概念がはたしてイデア論的な話題（イデアの原範型説）と関わっているのか否か、という問題を考察し、それに対して肯定的な答えを導いている。この対話篇は、いわゆる「ソフィスト」の定義を探究し、最終的にはそれを「影像の制作者」と定義する。ところで、この対話篇においても言及されている先行する対話篇『パルメニデス』では、イデア論に対する批判が大々的に展開され、特に、イデアと感覚事物との関係が問題視されていた。そしてまた、この『パルメニデス』を含む様々な箇所、イデアと感覚事物との関係が、原範型と像（オリジナルとコピー）の関係に例えられている。このような理由から、これまで様々な学者たちが、『ソピステス』での像概念の分析は、『パルメニデス』でのイデア論批判に対する何らかの応答であると想定してきた。しかし他方で、近年では、学者たちの多くがこのような想定を拒絶し、『ソピステス』での像概念の分析はイデア論的な話題とは無関係であると主張している。これに対して論者は、両者が密接に関係していることをあらためて論証した。まず、『ソピステス』の像のパラドクスがいわば述定表現と同定表現の区別によって解決されていることを確認し、さらに『パルメニデス』で提示されたイデア論批判の中でも最大のもの、いわゆる第三の人間論が、この述定表現と同定表現の区別によって解決されることを論じ、これらの議論から、『ソピステス』の像概念分析がイデア論

的話題と密接に関わっている、と結論づける。論者によれば、プラトンは、アイデア相互の関係性を研究することによって、アイデアと感覚物の関係性の問題を解決しようとしているのである。

第四章と第五章は、流転するこの自然界についての知識をプラトンがどの程度まで容認していたのかという問題を論じる。プラトンはしばしば、感覚を通じて経験するこの世界はすべて流転しており、われわれが発する言葉から逃れてしまうため、この世界について何ら確定的なことを語ることはできない、と主張している。プラトンのこのような見解は彼の知識論を構成する最も重要な要素の一つと考えられているが、しかし他方で、プラトンが時として、自然界についての何らかの記述・説明の可能性を示唆していることもまた事実である。第四章と五章では、このような感覚される世界の記述可能性と不可能性の間でプラトンがどのようにバランスを保っているのかを考察した。

まず、第四章では、『テアイテトス』第一部における言語と対象の問題を扱った。本対話篇の第一部では、テアイテトスによる「知識＝感覚」という定義と、プロタゴラスの相対説、ヘラクレイトスの流転説（知覚理論）の三つが複雑に絡み合った仕方で提示されているため、これらの相互関係をいかに解釈するかをめぐる論者たちの間で論争が生じている。そこでなぜこの定義が論駁されたのかをめぐる諸論者の解釈を、最終的論駁(184-7)の直前に語られていた、ヘラクレイトスの流転説の論駁(181-3)についての諸解釈を中心に整理・検討した。そうした検討に基づいて、流転説の論駁を通じて明らかにされたのは、感覚界における事態の一定程度の安定的・持続的性格と、感覚的性質に適用される同・異、類似・非類似、ある・あらぬ、など「共通のもの」と呼ばれる概念の安定性と客観性である。そしてこの「共通のもの」は、感覚的性質の同定可能性を開くものである。それはしばしばプラトンのアイデアとしての資格を備えているかどうかを取りざたされてきたが、論者によれば、アイデアとしての形而上学的な身分を備えてはいないものの、それに準じた存在である。

第五章は、プラトンが『ティマイオス』において流転する現象の記述可能性をど

の様な仕方で、どの程度まで、認めているのかを考察する。この対話篇の49b-50bは、約50年前に H. Chernissが「大いに誤読されてきたパッセージ」と呼んだ箇所であり、彼はそれまでの伝統的な解釈に代わる代替案を提示した。本章は、まず、Cherniss以降において比較的優勢であるこの代替案を批判的に検討し、それに代わる新しい解釈を提出している。

Cherniss以前の伝統的な解釈によれば、当該箇所ではプラトンは、現象としての火を「これ」と同定的に指示することを禁じる代わりに、「そのようなもの」として述定的に指示することを容認している。したがってプラトンは最終的には、流転するこの世界について語ることを禁じてはおらず、現象としての火を「火」と呼ぶ際に、それを「これ」として指示できる自立的なものとしてではなく、「そのようなもの」（つまり火のようなもの）として述定的にしか指示できないと論じていることになる。他方でChernissらの代替案によれば、ここでプラトンは、現象としてのこの火を「火」と呼ぶのではなく、〈これこれの性格〉を「火」と呼ぶべきだと主張している。つまり、「火」という語の適正な指示対象が、流転する現象としての火の現われではなく一定の永続的な性格をもつイデアの似像としての火だと言っているものであり、したがって厳密に言えば、流転するこの世界については語るのを禁じていることになる。論者は、両者の解釈を検討した結果、ギリシャ語の読み方としては代替案を採用するが、同時に、この代替案では「火」という語の適正な指示対象とされる「永続的な性格」なるものの存在論的な身分が不明確であることを指摘する。論者は、このような「永続的な性格」を感覚界を導入する解釈を拒絶し、

「火」の適切な指示対象としては、火のイデアの個別的な像（個々の火の現れ）が提案されていると解釈する。この解釈によれば、直接観察する火の現れを「火」と呼ぶことがプラトンによって容認されていることになる。しかし他方で火の現れなどの感覚的現象が物的で基体的な性格をもつというような世界観は放棄されている。

第六章は、以上のような考察を踏まえて、プラトンがイデアを感覚世界から分離した理由をごく簡単に考察し、さらに、いわゆる内在性格(immanent characters)の身分の解明についても、それが普遍的ではなく個別的な現象であることを論証し

ている。

(論文審査の結果の要旨)

プラトンが感覚経験を越えた知の対象としてアイデアの存在を構想するに至ったのはなぜか。その中心的理由は、感覚によって経験される世界はつねに生成流転しているため感覚される事象について何かを確定的に語ることや知ることが不可能だということにある、という見方がアリストテレス以来定着してきた。伝統的なプラトン解釈者たちの多くは、アイデア論と感覚的世界に対するこのような見方をプラトンが最後まで保持し続けていたと考える統一論者 (unitarian) である。しかし、プラトンが対話篇『パルメニデス』で自らアイデア論に対する批判を提出し、それ以後『ティマイオス』以外ではアイデア論を明示的に展開していないことを重視する人びとは、プラトンは後期対話篇ではアイデア論を疑う、ないしは放棄したと理解する。20世紀後半以後は、この見直し論者 (revisionist) の解釈も有力な選択肢であり続けている。見直し論は、後期にいたるとプラトンは感覚的世界について何らかの安定性や客観的性格を見出し、それについての言説や知識の可能性を認めたという解釈を伴っている。

本論文は、プラトン後期哲学におけるアイデア論と知識論の行方というプラトン哲学の根幹にかかわる問題に真正面から取り組んだものである。その中心的主張は、後期対話篇においてもアイデア論が堅持され、『パルメニデス』でのアイデア論批判にプラトン自身が応答を試みている、というものであり、その点では論者は統一論者である。しかし論者は、その応答の核となるアイデア論をめぐる考察が、アイデアと感覚される現象との関係の解明と感覚的世界についての認識論的な再評価に対しても貢献するとプラトンが考えていたと主張し、実際に後期の対話篇では、流転する感覚界についても何らかの記述と認識の可能性を認めていることを、テキストの詳細な分析を通じて明らかにしている。

論者はまず、『パルメニデス』でのアイデア論批判のあとに、そのような批判にもかかわらずアイデア論の重要性とアイデア相互の関係についての考察の必要性が登場人

物のパルメニデスによって示唆されていることに注目する。論者によればこの示唆に答えるべき議論が『ソピステス』において展開されている。より具体的には、アイデア相互の結合関係を通じて述定表現と同定表現の区別が確立され、このことを通じて、感覚界の存在論的身分を表す〈像〉の概念をめぐるパラドクスが解決されていることを論じる。

他方で感覚的世界の理解可能性については、『テアイテトス』でのヘラクレイトスの流転説に対する論駁が、感覚界における事態の一定の安定的性格と同・異、類似・非類似、ある・あらぬ、など「共通のもの」と呼ばれる諸概念の安定性と客観性を導いていると主張する。論者は、後者の諸概念が感覚的性質の同定可能性を保証するものであり、アイデアそのものではないとしてもそれに準じた存在であるとしてアイデア論との関係を展望している。さらに論者は、感覚的世界についてのプラトンの具体的な分析として『ティマイオス』49b-50bの記述に着目する。この箇所は約50年前に H. Chernissが「大いに誤読されてきたパッセージ」と呼び、新たな読み方を提示して以来、論争の的となってきた。Chernissらの代替案によれば、ここでプラトンは、たとえば「火」という語の適正な指示対象が、流転する現象としての火の現われではなく一定の永続的な性格をもつアイデアの似像としての火だと言っているものであり、したがって厳密に言えば、プラトンは流転するこの世界自体については語るのを禁じていることになる。これに対して論者は、Cherniss以後比較的優勢となったこの解釈が、従来の解釈と比べてギリシア語の読み方としては支持できるものの、語の指示対象である「永続的な性格」なるものの存在論的な身分が不明確であると指摘し、そのような「永続的な性格」を感覚界を導入するべきではないと主張する。論者はそれにかわって、「火」の適切な指示対象とされるのは端的に火のアイデアの個別的な像（個々の火の現れ）であるという新たな解釈を提案している。

本論文の大きな功績は、以上のように、アイデア論についての統一論者も見直し論者も、ともに受け入れていたアリストテレス以来の基本的前提に再考を促していることである。すなわち本論文の示すところに従うなら、理論的には、アイデア論は感

覚される世界についての記述と知識の不可能性から帰結する理論ではない。そして少なくとも後期の対話篇では、プラトンはイデア論を堅持しながらも感覚的世界について最小限ではあれ発話と認識の可能性をむしろ積極的に論証している。感覚的世界に何らかの安定性を認めることはイデア論と矛盾せず、かえって感覚的世界に対する認識論上の一定の評価はイデア論についての考察の深まりと連動しているのである。このような論者の見解は、たんに後期対話篇でイデア論は保持されたか否かという表面的な論争を超えて、イデア論の成立根拠という根本問題についての重要で基本的には適正な展望を開くものである。

また、以上のような展望を裏づけるために、後期対話篇での多くの重要箇所について諸解釈を手際よく整理しながら、むしろ対立する諸解釈が共有している前提をも確認・検討し、新鮮な読み方をいくつも提示していることも、評価されるだろう。

ただし、いくつか改善が望まれる点があることも指摘されねばならない。第一に、本論文は全体としては以上のような展望を開くものであるが、各章の議論がそのような展望を支えるようによく組織化されているとは必ずしも言えないこと、第二に、従来の諸解釈に対する批判は多くの場合説得的であるが、論者自身の解釈を支持する議論が十分に展開されていない場合も散見されること、第三に感覚的世界の「客観性」や「安定性」などの重要諸概念の理解にはさらなる明確化が求められること、などである。しかしこれらの問題は、論者自身が自覚していることでもあり、本論文の示した重要な成果についての評価を躊躇させるほどのものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2008年11月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。